猫と癒しとホームレス

2020年7月
眞鍋由比

今年の読書運動のテーマが癒しなので思いついたのが

『ボブという名のストリートキャット』ジェームズ・ボーエン著　辰巳書房2013年
　親兄弟や友人から見放されてホームレスになったジェームズ。誰も信じられなくなった彼はある日傷ついたネコと出会い、自分の食費を削ってその治療費を払い、面倒を見ているうちに、周囲の彼を見る目が変わってくる。心無い中傷や嫌がらせにあってもボブを守ろうとする彼がボブと一緒にささやかな幸せをつかむ。動物との友情や愛情が、本当に成立するんだと思えてしまうノンフィクション。奇跡の猫ボブは今年の６月15日に亡くなってしまい、遺作となった映画の第２作が2021年日本公開予定です。（映画はどちらもボブ自身が出演）

とはと時計7月号に入れてもらおうと思っていたら既に紹介してくれた先生がおられたので、あきらめました。

その代わり、ホームレスつながりで映画**『パブリック　図書館の奇跡』**を紹介します。
　シンシナティの図書館員スチュアートは質素で地味な生活を愛していた。けれどある日、図書館の玄関で顔見知りのホームレスが凍死しているのを見てしまう。そしてホームレスの仲間うちで昨日まで一緒に居た奴がいないと大騒ぎに。大寒波がきているのに市のシェルター（避難所）は満杯で、入れる最寄の避難所まで40分も歩くのは無理。…ということでホームレスたちは図書館に一晩、居させてくれと頼んでくる。それは難しいだろうと思いながら館長に掛け合うスチュアート。やはり難色を示され、ホームレスたちは思い余って図書館を占拠してしまう。そしてスチュアートは外との交渉役になるのだが、警察や市長選で票をとりたい検事のスタンドプレイのため、人質をとった立てこもりの主犯にされてしまう。
　スチュアートの過去をほじくりだして凶悪犯のように扱うマスコミ、病気の母親のために早く帰宅したいが、スチュアートも気がかりで手伝う同僚、図書館の在り方を真剣に考える館長。騒動が広がって、家に帰らない失踪した息子を案じる刑事、ホームレスに服や物資を差し入れしようとする市民や牧師などいろいろな姿が見られます。

　この占拠事件の前にスチュアートは図書館のガードマンとホームレスの一人を周囲の人が臭いに困るからと外に出したことが問題となって（市民の情報アクセスの権利を侵害している！）検事とやりあって訴えられます。実際図書館でも利用者のにおいの苦情が多いと、どちらを優先すべきなのか、悩ましい問題ではあります。
　昨年10月12日、台風19号が接近し、台東区が、避難所になった区立小学校を訪れたホームレスたちの受入れを「区内に住所がない」という理由で拒否して問題になったことがありました。ここを追い出されたら死ぬかもしれない人たちを追い出す？
　人の立場にたって考えることは難しいけど、『ボブという名のストリートキャット』を読んで、ジェームズを荒れ狂う台風の中追い出せますか？臭いがすごかったとしても。

いろいろなことを考える映画でした。シネリーブル神戸で上映中。

　ホームレス支援の雑誌・ビッグイシューも見てくださいね。今号にこの映画も紹介されています。何冊かバックナンバーも図書館に置いています（ボブの号も）。
　ホームレスの人が人生相談に答えた**『幸せの人生レシピ　世界一あたたかい人生相談』**ビッグイシュー販売者・枝元なほみ2008著　ビッグイシュー日本2008　もあります。これも味のある人生相談で癒されますよ。